



- アマゴの発眼卵放流
- 不定期連載〈5〉川の思い出
- 石 その式
- 今月の一枚
- 平戸橋周辺の自然観察(最終回)
- 研究所の調査風景

豊田市矢作川研究所

〒471-0025

愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028

homepage <http://www.hm.aitai.ne.jp/yahagi/index.html> e-mail yahagi@hm.aitai.ne.jp

*Rioはホームページ上でもご覧になれます

アマゴの発眼卵放流

新見克也

アマゴの放流といえば昔はどこでも稚魚放流が主流だったが、近ごろでは、養殖池で擦れて尾ビレがボロボロになった成魚アマゴを放流するところが多くなっている。何時間も運転してたどり着いた水の澄んだ溪流で、そんな成魚放流ものが釣れると本当にがっかりするものだ。

嘆いていても仕方ないので、2年ほど前から釣り仲間と一緒に、矢作川上流部への「アマゴの発眼卵放流」を計画している。ノウハウは釣り雑誌やインターネットで勉強し、第1回目を平成12年の晩秋に予定していた。ところが同年9月の東海豪雨で放流予定の沢が崩壊してしまい、翌13年も回復しなかった。いまだ実行できていない。

自主放流をもう一年延期すると決めた矢先、矢作川漁協から「介木川へ発眼卵放流をして欲しい」という依頼があった。介木川は国道153号の伊勢神トンネル近くに源流をもち、東加茂郡旭町小渡の中心街で矢作川に合流している支流だ。さほど急勾配でなく、里川

の相をしている。漁協が毎年アマゴの稚魚放流をしているが、今回は試験的に発眼卵放流に変更するのだという。未経験のことなので少しばかり躊躇したが、経験を積むチャンスである。引き受けることにした。

発眼卵放流には色々なやり方があるが、今回は、子どもが昆虫採集に使う虫かごを改造して保護ボックスをつくり、その中に発眼卵を入れて河床に沈める方法を採用した。アマゴの自然産卵は河床で行われ、孵化した仔魚は卵黄を吸収し終えるまで礫の間で生活する。サワガニやウグイなどの天敵に食べられることも多いだろう。発眼卵放流では、その最も弱い時期を、保護ボックスの中でぬくぬくと生活してもらうのだ。

用いた発眼卵は1万8千粒。設楽町にある愛知県淡水養殖漁業協同組合から1粒2円で購入した。発眼どころか孵化直前で、中でクルクルと動いている卵もある。ただ、食用のイクラと違って受精卵はとても丈夫なので、取り扱いに気を遣う必要はない。

放流地点の選定は地元の人をお願いするのが一番で



虫かごを改造した保護ボックスに約500粒(レンゲに山盛り2杯ほど)の発眼卵を入れ、川底に設置した。



孵化したばかりの仔アマゴ。この姿をみて感動しない人はいないだろう。子ども達にやらせたいものだ。

ある。同町八幡の増田邦夫さんに6地点（下平・余平・八幡・榎本・日下部2地点）を決めて頂き、矢作川天然アユ調査会の若手メンバー4名と、地元の人5名の共同作業で、11月24日に放流作業を行った。

水槽車が必要な稚魚放流と違い、発眼卵放流は水を運ばなくても良いので誰にでも実行できる。安価にできる点もメリットだ。ただ、多くの人手が必要なので、人件費のことまで考えると高くつくかも知れない。漁協が行うよりも、川を守ろうという地域やグループの自主活動にうってつけの方法だろう。

作業自体は難しくない。発眼卵を入れた保護ボックスを河床に置き、紫外線が卵に当たらないように、かつ、新鮮な水が通るように、周囲を石で覆うだけだ。今回は保護ボックス1個につき発眼卵を約500粒入れ、それを1地点につき6個ずつ設置した。溪流に病原菌を持ち込まないように卵には消毒も施した。

次の表は、放流から2週間後に調べた各地点の孵化成績だ。下平・余平・榎本の3地点は完全に失敗である。虫かごが砂に埋まって多くの卵が死んでしまっていた。八幡は埋没していなかったが泥を被っており、

孵化率は高くなかった。砂も泥もほとんどない日下部の2地点は大成功で、ほとんどの卵が孵化していた。

地点	放流数	孵化数	孵化率	状況
下平	3,000	860	28.7%	埋没or泥被り
余平	3,000	23	0.8%	埋没
八幡	3,000	2,032	67.7%	少し泥被り
榎本	3,000	42	1.4%	埋没
日下部	3,000	計数せず	95%以上	砂も泥もなし
日下部	3,000	計数せず	95%以上	砂も泥もなし

今回の結果から分かったのは、発眼卵放流は砂や泥が少ない場所で行う必要があるということだ。とくに、地質上の理由から砂が多い矢作川水系では、保護ボックスの設置場所の選定には細心の注意が必要である。しかし、放流場所さえ間違わなければ孵化率はかなり高いことも分かった。そういう成功地点の保護ボックスを開けたときの感動は素晴らしいもので、おもわず「ウヒャー」と声をあげてしまったほどだ。こういう体験は、ぜひ、子ども達にもさせたい。

（にいみ かつや、矢作川天然アユ調査会会員）

私の幼少から中学時代にかけて（とりわけ小学校時代）は、まさに川で遊んで川で育った少年期であり、学校の勉強よりも魚釣りが大好きで、「川の子」そのものの生活でした。当然その頃は、現在のように学校にプールはなく、夏休みになれば、地元の巴川で水遊びに明け暮れる毎日を送っていました。大体は、昼の1時から4時までの遊泳時間であったと思いますが、毎日水泳の時間が待ちきれずに30分位前から遊泳指定場所にむかい、監視役の近所のおばさんたちがやってくるのを首を長くして待っていたように覚えています。大抵そういう時は、少しまけてもらって、早めに泳がしてもらえたように覚えています。その頃は、川の水も今よりは断然きれいで水中が透けて見え、水中メガネを使って潜って魚をつかんだり、ヤスでついたり、誰かが水中に投げた石を競争で拾ったり、川の中で鬼ごっこをやったりと、とにかくありとあらゆる遊びを自然とやっていたようです。

魚の種類も豊富で、シラハエ、アカシ、ムツ、モロコ、ウグイ、ハス、ニゴイ、本ゴイ、ドンコウ、テッキリ、ダバンチョ、うなぎ、鮎などなど、とにかくたくさん魚がうようよいて、それぞれ色々な手法で釣ったり、つかんだりしていました。たとえば、ウジやミミズ、アオムシ、蜂の子、クリ虫、アザミの虫などを使ったえさ釣りや毛ばり

不定期連載(5)

川の思い出

磯谷裕司

はもちろん、どじょうを使ったすてばりなどいろいろやりました。ここら辺の子ども達は、大人から子どもへ、上級生から下級生へと自然な形でこれらの伝統を引き継いで、遊びの中でいとも簡単に技術を身につけていったわけですね。今でも、当たり前のように覚えているんですが、それから歳月が流れ、自然環境も社会状況もかわってしまい、今ではこういう光景も見られず、伝統のワザも忘れられつつあるのがとても残念です（自分の子どもだとかその友達などに、多少なりとも伝授しようと試みたこともありましたが、まわりの環境の変化もあってか、なかなか上手くいきませんでした）。

子どもの頃の楽しい思い出は大人になった今でも影響を及ぼしており、私自身は、現在まで約20年間鮎釣りにいそしんでいます。そんな中、最近はやはり環境の変化、特に水質の悪化が一番問題であると感じています。平成13年度から河川課にお世話になったのも何かの縁のような気もしており、公私ともども「川の子」に戻れるように、またいつか、川で遊べるようになる日が来ることを願って、川と付き合っていきたいと思っています。

（いそがい ゆうじ、豊田市役所河川課）

石

その 哉

河合良三

夏もそろそろ終わりに近づいたころ、アマゴ釣りに誘われ、久しぶりに付知川（木曾川水系）の源流に行きました。付知町から車で一時間ほど山を行ったところから川に降り、アマゴを釣りながら渓流を登っていききましたが、期待したアマゴのあたりはありません。水は冷たく透き通っていて河床まではっきりと見え、そうなると、さすがにアマゴは警戒して姿を見せませんでした。……釣果なし。

さて、この付知川渓谷はよく開析が進んだ急流の谷です。堅い岩の部分が露出しており、所々に天然の石でできた自然の落差がすばらしい景観をつくりだしています。落差は、個々の石が絶妙なバランスで互いに絡み合い、洪水に対してよほどのことがないかぎり壊れることはないようです。自然のなす技に驚かされま

す。岩床では、洪水にもガンとして動かない大きな石が基礎石となって、その上に個々の石が噛み合っています。石と石の間に上流から流れてきた小石や砂が詰まって落差ができますが、度々の洪水により小石や砂が流され、新しい小石や砂に取って変わります。河床が洪水の度に新陳代謝をしているわけで、こうした自然石の噛みあってできた生息空間や、河床が絶えず変化をすることにより豊かな自然が保たれるのです。そしてそれは、数多くの魚が棲む、豊かな自然を育みます。

今、私たちの身近にある川は自然とはほど遠い工事が行われています。私たちの生命・財産を護るために必要なら仕方ないと思いますが、全部が全部必要であるとは思えません。少しでも自然のことを考えて河川工事をすれば、今より少しは自然が豊かな川になるはずです。

そこで注目されるのが、被災した古峯水辺公園の水制工の復旧工事です。この工事は、自然石を使用した石積み工法（指導：(株)西日本科学技術研究所 福留脩文氏）を用いておこなわれました。先に述べた、「自然の

ことを考えた河川工事」の一つだと言え、今後の河川工事の参考になると思っています。

※地上の起状に多数の谷が切れ込んで河川が侵食する作用「広辞苑第五版」

(かわい りょうぞう、
愛知県衣浦港工事事務所
岡崎出張所 所長)



付知川 二〇〇一年九月下旬

筆者撮影 (二枚とも)

古峯の初雪景色
古峯水辺公園から平戸橋（上流）を望む
(二〇〇二年一月二日 横井恭夫氏 撮影)



今月の一枚

平戸橋周辺の自然観察(最終回)

山原勇雄

この連載も最終回とあって、私は毎月第4日曜日に開催している「草だらけの会」の集合場所であり起点でもある“平戸橋いこいの広場”周辺の観察取材に出かけました。

平戸橋いこいの広場から民芸館へのエリアには、常緑樹のヤマモモ、マテバシイが数本あり、立春のこの時期も生きいきとしています。川沿いの方に目を移すと、ふくらみ始めたソメイヨシノの花芽を確認する事が出来ましたが、葉のないこの季節は、テングス病による密集した小枝が目立ちました。そんな中で、早春を思わせるコブシ（モクレン科）の大きくなり始めたつぼみは心をなごませてくれました。さらに、民芸館脇から前田公園駐車場を抜け愛知みずほ大学へ行く林間道では、地面にロゼット状に葉



我家の庭で撮った朴の花を題材にした作品「朴の妖精」

を広げたマツヨイグサやチチコグサ、ヒメジョオンを確認、太陽の光を受けてたくましく生きる自然界の生命を切々と感じました。

さて、最後になりましたが、この連載によって、より幅広く自然の生態を学ぶことができ、嬉しく思います。ありがとうございました。

※天狗巣病：菌類などの寄生、生理的障害の結果、側芽が異常に発達し、小枝が密生する。「広辞苑第五版」

(やまはら いさお、平戸橋自然観察『草だらけの会』)

研究所の 調査風景



川敷における5年間の生物調査結果（所報「矢作川研究」No.5掲載）を分かりやすく紹介するとともに、矢作川の自然をまちづくりにどう活かしていくか考えるというテーマで、田中・洲崎両研究員による基調講演が行われました。パネルディスカッションでは古川彰氏（関西学院大）と大西行雄氏（株環境総合研）に加わって頂き、環境保全やまちづくりを進める際の市民参加のあり方やキー・シンボルの扱いについて本質的な議論が展開されました。（洲崎）



1月30日(木)

昨年11月20日から愛知県豊田土木事務所と共催で、「『矢作川を語る』座談会」を開催しました。この座談会は豊田土木事務所に在職され、活躍された方々に集まっていただき、往時の河川行政を語っていただくことを目的としました。この日は最終回（全5回）で、「矢作川の管理」を主題とし、矢作川汚濁問題（昭和40年代）への愛知県の対応策などを伺うことが出来ました。全5回の

座談会会議録は、矢作川の歴史を振り返る上で、貴重な資料です。この座談会の内容は、会議の録音テープや座談会参加者の方々からお借りした資料を中心に、冊子にまとめる予定です。（小川）

2月14日(木)

この日は第7回目になる当研究所のシンポジウムが開催されました。今回は「矢作川の自然をまちのなかに」と題し、市内中心部の矢作川河

お詫びと訂正 前号掲載の「矢作川中流域のトビケラと生息環境」に使用した写真の注釈が逆になっておりました。正しくは向かって左が「ケシヤマトビケラ的一种」、右が「ツダヒゲナガトビケラ」です。ここに訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

今月号をふと振り返ると、図らずも「川を愛する男特集」になっていました。寄せられた文章からは、魚が育つ川、子どもが成長する川、絶えず表情を変える川、川岸に生きる草花の魅力が伝わってきます。Rioを通して、多くの人々が持つ川への思いを多くの人に伝えること、それは研究所にとって幸せな仕事の一つです。（小）

ご意見・ご感想をお寄せください